ギリシア人への演説

タティアノス
藤遥　制作

1〜4章　ギリシャ人のわざと哲学者たち、わたしたちの神

1:1 ギリシャの人々よ、異民族に対して、そんなにも敵意を抱いてはなりません。彼らの説をねたんではなりません。実際、あなたがたのもとにあるわざで、その起こりを異民族から得なかったものが、一つでもあるでしょうか。1:2 実際、夢による占いを見いだしたのは、テルメッソスの人々の中でも最も名高い者たちでした。星による予知はカリア人が、鳥の飛び方による占いはフルギヤ人と、イサウリア人の最も古い者たちが見いだしました。いけにえによる占いはクプロ人が、天文学はバビロン人が見いだしました。魔術はペルシャ人が、幾何学はエジプト人が、文字による教育はピニケ人が見いだしたのです。1:3 ですから、模倣を発明と呼ぶのはやめなさい。実際、詩を作ることと歌うことをあなたがたに教えたのはオルフェウスで、秘儀を受けることを教えたのも同じ人でした。像を形づくることはトスカナ人が、歴史を書きまとめることはエジプト人の年代の記録が教えたのです。1:4 また、あなたがたは笛の技を、マルシュアスとオリュンポスから受け取りました。この二人はどちらもフルギヤ人で、田舎者でありながら、葦笛による調べを作り上げたのです。ラッパはテュレニア人が、鍛冶はキュクロプスたちが見いだしました。手紙を書くことは、かつてペルシャ人を治めた女が始めたと、ヘラニコスが言っています。その女の名はアトッサでした。1:5 それゆえ、このうぬぼれを捨てなさい。言葉の見ばえを盾にしてはなりません。あなたがたは自分で自分をほめ、身内の者を弁護人にしているのです。分別のある人は、ほかの人からの証言を待つべきです。また、言葉を口にするときにも、ほかの人々と声をそろえるべきです。1:6 ところが、あなたがただけは、ふだんの話し言葉でさえ声がそろわないことになっています。実際、ドーリス人の言い回しはアッティカの人々と同じではなく、アイオリス人はイオニア人と同じようには話しません。1:7 不一致があってはならない人々のあいだに、これほどの不一致があります。それで、だれをギリシャ人と呼ぶべきか、わたしは途方に暮れるのです。実際、何よりもおかしなことに、あなたがたは自分たちとは縁のない言い回しを重んじてきました。そして、ときには異民族の言葉を使って、自分たちの言葉をごちゃまぜにしてきたのです。1:8 このために、わたしたちは、あなたがたのもとにある知恵に別れを告げました。たとえわたしが、その中でひどく重んじられた者であったとしてもです。実際、喜劇作家の言うとおり、『これらは取り残しのぶどう、おしゃべり、つばめの歌の稽古場、技を汚す者たち』です。1:9 この知恵を求める者たちは、声を張り上げてわめき、からすのような声を出します。実際、あなたがたは弁論術を、不義と中傷のために作り上げました。報酬を取って、自分たちの言葉の自由を売り渡しています。今は正しいとしたことを、のちには良くないと示すことも、たびたびです。また、詩作の術を作り上げたのは、戦いや神々の恋や魂の堕落を書きつづるためです。

2:1 実際、あなたがたは哲学をして、何か尊いものを生み出したでしょうか。きわめて優れた人々のうち、だれがほらを吹かずにいたでしょうか。ディオゲネスは、たるに住むことを誇って、自足を気取りました。ところが、たこを生で食べて腸のつまりにかかり、その不節制のために死んだのです。2:2 アリスティッポスは紫の衣を着て歩き回り、自分の信条にふさわしく放蕩にふけりました。プラトンは哲学をしながら、大食のために、ディオニュシオスの手で売られました。アリストテレスは、無知にも摂理に境界を定め、幸福を自分の気に入るものの中に限りました。そして、ひどく無教養にも、相手がまだ若者だということも忘れて、アレクサンドロスにへつらったのです。このアレクサンドロスは、自分を拝もうとしなかった友人を閉じ込め、熊か豹のように連れ回しました。まったくアリストテレス流のやり方です。2:3 まったく、彼は師の説によく従ったものです。勇気と徳を酒宴で見せびらかし、身内の者で最も親しい友を槍で刺し貫きました。そしてまた、身内の者たちに憎まれないように、悲しみを口実に泣いて、食を断ったのです。2:4 今に至るまでアリストテレスの説を振り回している者たちも、わたしは笑ってやりたいところです。彼らは、月より下のものには摂理が

及ばないと言います。ところが、彼ら自身は月よりも地に近く、月の軌道より下にいながら、摂理の及ばないものに摂理を働かせているのです。また、アリストテレスによれば、美しさも富もからだの強さも生まれの良さもない人々には、幸福はありません。そのような者たちは、勝手に哲学していればよいのです。

3:1 実際、わたしはヘラクレイトスを認めません。『わたしは自分自身を探った』と言ったこの人は、独学で、高慢だからです。また、彼が自分の著作をアルテミスの宮に隠したことも、ほめません。のちにそれが秘儀めいた仕方で世に出るためでした。実際、こうしたことに関心のある人々は言います。悲劇作家のエウリピデスは宮に行ってそれを読み、少しずつ覚えては、ヘラクレイトスの難解な言葉を熱心に伝えたというのです。3:2 さて、この人の無知は、その死が暴きました。実際、彼は水腫にかかり、医術を哲学のように修めて、自分のからだに牛の糞を塗りました。すると糞が固まって、からだ全体を引きつらせたので、彼はけいれんを起こして死んだのです。3:3 実際、ゼノンも退けなければなりません。彼は、世界の焼尽を経て、同じ人々が同じことのためにふたたびよみがえると明言しました。つまり、アニュトスとメレトスは告発のため、ブシリスは旅人殺しのため、ヘラクレスはふたたび功業のためによみがえるのです。この人は世界の焼尽についての論で、悪い者が正しい者より多いとしています。正しい者は、ソクラテスとヘラクレスがそれぞれ一人と、ほかに同じような人々がわずかにいただけで、多くはなかったからです。3:4 実際、悪い者は、良い者よりもはるかに多いことになるでしょう。また、この人によれば、神は悪の作り手だということになります。神は、下水溝やうじ虫や、口にするのもはばかられることをする者たちの中に住むことになるからです。実際、エンペドクレスのほらは、シチリアで噴き上がる火が明らかにしました。彼は神でもないのに、神だと偽っても同然だったのです。3:5 わたしは、フェレキュデスの老婆の繰り言も笑います。ピュタゴラスがその説を受け継いだことも、また、認めたがらない人々がいても、プラトンがこの説をまねたことも笑います。3:6 実際、クラテスの犬のような結婚に、だれが賛同の証言をするでしょうか。むしろ、彼に似た者たちの、うぬぼれた言葉の狂乱を退けるはずです。そして、まことに優れたものを探し求めるほうに向かうのではありませんか。3:7 ですから、哲学者たち、いや哲学者でもない者たちの晴れがましい集まりに、押し流されてはなりません。彼らは互いに反対の説を立て、めいめいが思いついたことを口に出してきました。彼らのあいだにも、ぶつかり合いがたくさんあります。実際、一人がもう一人を憎み、互いに反対の意見を持ちます。そして、思い上がりのために、目立つ場所を選び取るのです。3:8 本来なら、彼らは、自分から先回りして王たちに仕えたり、指導者たちにへつらったりするべきではありませんでした。そうではなく、身分の高い人々が自分たちのところに来るまで待つべきだったのです。

4:1 実際、ギリシヤの人々よ、あなたがたはなぜ、拳闘のように、国々の権力をわたしたちにぶつけようとするのですか。また、ある人々の掟に従おうとしないからといって、なぜわたしは、最も汚らわしい者のように憎まれているのですか。4:2 王が貢を納めよと命じるのですか。わたしは納める用意があります。主人が仕えよ、務めを果たせと命じるのですか。わたしは奴隷の身分をわきまえて、仕えます。実際、人は人として敬うべきですが、恐れるべきなのは神だけです。この神は、人間の目には見えず、人の技でとらえることもできないかたです。4:3 ただ、この神を否めと命じられるときだけは、わたしは従いません。むしろ死にます。偽り者、恩知らずと示されないためです。わたしたちの神は、時の中で成り立ったのではありません。この神だけが始まりのないかたであり、ご自身が万物の始まりであられます。4:4 『神は霊』であられます（ヨハネ四・二四）。ただし、物質の中に行き渡る霊ではありません。物質的な霊と、物質の中の形とを造られたかたです。神は見えず、触れることもできないかたで、ご自身が、感覚でとらえられるものと見えないものとの父となられました。4:5 わたしたちは、この神をその創造によって知り、その力の見えない性質を、造られたものによって悟ります（ローマ一・二〇）。神がわたしたちのために造られたものを、わたしは拝もうとは思いません。4:6 太陽も月も、わたしたちのために造られました。それなら、どうしてわたしは、自分に仕えるものを拝めるでしょうか。どうして木や石を神々だと言えるでしょうか。実際、物質の中に行き渡る霊は、それよりも神に近い霊に劣ります。そして、魂になぞらえられるこの霊に、完全な神と同じ誉れをささげるべきではありません。4:7 また、名で呼ぶことのできない神を、贈り物で動かそうとするべきではありません。何一つ必要としな

いかたを、何かを必要とするかのように、わたしたちがそしるべきではないからです。では、わたしたちのことを、もっとはっきり述べましょう。

5〜8章　ロゴスと創造、復活、悪霊となった天使と神々

5:1 神は初めにおられました。そして、わたしたちは、この始まりとはロゴスの力のことだと教えられてきました。実際、万物の主であられる神は、ご自身が全体の実体であられます。まだ創造がなされていなかったという点では、神はただひとりでおられました。しかし、神がすべての力であり、見えるものと見えないものの実体であられたという点では、万物は神とともにありました。神のうちにあったロゴスご自身も、理性の力によって、神とともに存在しておられたのです。5:2 そして、単純であられる神のご意志によって、ロゴスが飛び出されます。ロゴスは、むなしく出て行かれたのではなく、父の最初に生まれたわざとなられます。わたしたちは、このかたが世界の始まりであることを知っています。5:3 このかたがお生まれになったのは、分かち与えによるのであって、切り離しによるのではありません。切り取られたものは、もとのものから離されてしまうからです。しかし、分かち与えられたものは、務めを選び取り、それが取り出されたもとのかたを、欠けたものにはしないのです。5:4 実際、一本のたいまつから、多くの火がともされます。しかし、多くのたいまつに火を移したために、最初のたいまつの光が減ることはありません。それと同じように、ロゴスも父の力から出て来られましたが、お生みになったかたを、ロゴスのないものにはなさいませんでした。5:5 実際、わたし自身も語り、あなたがたは聞いています。けれども、言葉が移って行ったからといって、語りかけているわたしが、言葉のない空っぽな者になるわけではありません。そうではなく、わたしは自分の声を発して、あなたがたのうちの秩序のない物質に秩序を与えようと決めているのです。5:6 ロゴスは初めにお生まれになると、ご自分のために物質を造り出し、今度はわたしたちの世界を生み出されました。それと同じように、わたしも、ロゴスになって新しく生まれ、真理をつかみました。そして、わたしと同じ種類の物質の混乱を整え直しているのです。5:7 実際、物質は、神のように始まりのないものではありません。始まりがないために神と同じ力を持っている、というのでもありません。物質は生じたものです。ほかのだれかによってできたのではなく、ただ万物の造り主ひとりによって、生み出されたのです。

6:1 このために、わたしたちは、万物の終わりの後に、からだの復活もあると信じています。ストア派の人々は、ある周期がめぐるたびにそれが起こると説を立てます。同じものが何の役にも立たないまま、いつも生じては消えていくというのです。わたしたちが信じる復活は、そのようなものではありません。そうではなく、ただ一度、わたしたちの時代が終わったときに、完全な形で起こるのです。それは、裁きのために、ただ人間だけを成り立たせるためです。6:2 わたしたちを裁くのは、ミノスでもラダマンテュスでもありません。神話によれば、この二人が死ぬまでは、魂は一つも裁かれなかったといいます。そうではなく、造り主である神ご自身が審判者となられるのです。実際、たとえあなたがたが、わたしたちを、まったくたわごとを言う者、おしゃべりだと思っても、わたしたちは気にかけません。わたしたちはこの論を信じてきたからです。6:3 実際、わたしは、生まれる前には存在せず、自分が何者であるかを知りませんでした。ただ、肉の物質の実体のうちにあっただけです。しかし、かつてはいなかったわたしが、生まれたことによって、自分が存在することを信じています。それと同じように、生まれて、死によってもはや存在せず、ふたたび見えなくなったわたしも、また存在するようになります。かつていなかったのに、その後生まれたのと同じようにです。6:4 たとえ火がわたしのこの肉を消し去っても、蒸気となった物質を、世界が受け入れています。たとえ川の中で、海の中で尽き果てても、たとえ獣に引き裂かれても、わたしは豊かな主の倉にしまわれているのです。6:5 貧しい者、神を知らない者は、しまわれているものを知りません。しかし、王であられる神は、お望みのときに、ご自分にだけ見える実体を、もとのとおりに回復されるのです。

7:1 実際、天のロゴスは、父からお生まれになった霊であり、理性の力から出られたロゴスであられます。このロゴスは、ご自分をお生みになった父にならって、人を不死の像として造られました。それは、不朽が神のもとにあるのと同じように、人も神の分け前にあずかって、不死をも持つためでした。7:2 さて、ロゴスは、人間をお造りになる前に、天使たちの造り主となられます。そして、どちらの種類の被造物も、自由な意志を持つものとして生じ、善の本性は持っていませんでした。善は、これもまた神のもとにだけあるものです。ただ、人間は、選びの自由によって、それを全うするのです。それは、悪い者が正しく罰せられるためです。その者は、自分のせいで邪悪になったのですから。また、正しい者が、そのりっぱな行いのゆえに、ふさわしくほめられるためです。その者は、自由な意志を用いて、神のみこころに背かなかったのですから。7:3 天使と人間のことは、このとおりです。さて、ロゴスの力は、これから起こることを予知する力をご自分のうちに持っておられました。それは運命によってではなく、自由に選ぶ者たちの意志によって起こることです。この力は、将来の出来事を前もって告げておられました。そして、禁止によって悪を妨げ、善のうちにとどまる者たちをほめておられたのです。7:4 ところが人々は、最初に生まれたために、ほかの者たちよりも賢かったある者について行きました。そして、神の律法に逆らうその者さえ、神として示したのです。そのとき、ロゴスの力は、この狂気を始めた者と、彼について行った者たちとを、ご自分とともに暮らすことから退けられました。7:5 そして、神のかたちに造られた者は、より力のある霊が離れたので、死ぬものとなります。一方、最初に生まれた者は、その背きと無知のために、悪霊となります。そして、彼をまねた者たち、すなわち彼の幻影たちは、悪霊の軍勢となりました。彼らは、自由な意志を持っていたために、自分たちの愚かさに引き渡されたのです。

8:1 そして、人間が、彼らにとって離反の材料となります。実際、彼らは人間に星の配置の図を示して、さいころ遊びをする者たちのように、ひどく不公平な運命を持ち込みました。裁く者も裁かれる者も、運命によってそうなったからです。殺す者も殺される者も、富む者も貧しい者も、同じ運命から生まれたものです。そして、人の誕生はすべて、劇場でのように、彼らに楽しみを与えてきました。ホメロスが言うとおり、彼らのもとでは『幸いな神々のあいだに、消しがたい笑いが起こった』のです。8:2 実際、彼らは剣闘士の戦いを眺め、どちらか一方の味方をして熱くなります。結婚し、少年を汚し、姦淫します。笑ったり怒ったり、逃げたり傷を負ったりします。そのような者が、どうして死ぬものと思われずにすむでしょうか。8:3 彼らは、自分たちの本性を人間に現した、まさにそのことによって、聞く者たちを、同じような行いに向かわせたからです。それに、悪霊たち自身も、彼らの頭であるゼウスとともに運命の下に落ち、人間と同じ情念に支配されたのではありませんか。8:4 また、ほかの点から見ても、説がひどく食い違っている者たちに、どうして誉れをささげるべきでしょうか。実際、フルギヤの山々の人々は、レアをキュベレと呼びます。そして、このレアが、愛するアッティスのために、陰部を切り取ることを掟にしたと言います。ところが、アフロディテは結婚の交わりを喜びます。8:5 アルテミスは魔術師で、アポロンは病を治します。また、ポセイドンの愛したゴルゴンの首がはねられたとき、彼女から馬のペガソスとクリュサオルが躍り出ました。その血のしずくを、アテナとアスクレピオスが分け合いました。そして、彼はその血で人を救い、彼女は同じ血のりで、人殺しとなり、戦いを起こす者となったのです。8:6 わたしの思うに、アテネの人々は、この女神をそしりたくなかったのです。それで、ヘファイストスとの交わりから生まれた子を、大地のものとしたのです。アタランテはメレアグロスのために勇ましさを失いました。アテナも同じように、ヘファイストスのために勇ましさを失ったと思われないためです。8:7 実際、両足の曲がった者は、留め金や曲がった腕輪を作る職人でした。おそらく、その乙女の飾りで、母のない孤児の娘をだましたのです。ポセイドンは船に乗り、アレスは戦いを喜び、アポロンは竪琴弾きです。ディオニュソスはテーバイの人々を暴君として治め、クロノスは暴君を殺します。8:8 ゼウスは自分の娘とも交わり、娘は彼によってみごもります。今ここで、エレウシスと秘儀の蛇と、『汚れた者たちには戸を閉ざせ』と言うオルフェウスとが、わたしのために証言するでしょう。8:9 アイドネウスがコレをさらい、その行いが秘儀となりました。デメテルは娘のために泣き、アテネの人々のせいで、ある人々はだまされています。レトの子の神域には、オンファロス（へそ）と呼ばれる場所があります。ところ

が、そのオンファロスは、ディオニュソスの墓なのです。8:10 ダフネよ、今こそあなたをほめましょう。あなたはアポロンの放縦に打ち勝って、彼の予言の術を暴きました。彼はあなたに起こることを前もって知らなかったので、自分の術から何の益も得なかったのです。8:11 遠矢を射る者は、今ここで、わたしに言えばよいのです。ゼピュロスはどのようにしてヒュアキントスを殺したのか。ゼピュロスが彼に勝ったのです。悲劇作家は『風は神々の最も尊い乗り物』と言っています。それなのに、アポロンは小さな風に負けて、愛する者を失ったのです。

9〜12章　運命と星座、神々の変身、自由と二つの霊

9:1 悪霊とは、このような者たちです。運命を定めたのは、この者たちです。そして、彼らにとって、その土台となったのは動物の姿でした。実際、彼らは天の住まいから追い出されて、地を這うもの、水の中を泳ぐもの、山にすむ四つ足の獣とともに暮らしていました。その動物たちを、彼らは天の誉れにふさわしいとしたのです。それは、自分たちが天に住んでいると思われるためでした。また、地上の理性のない暮らしを、星の配置によって、理にかなったものと見せるためでした。9:2 そのため、気性の激しい者も苦労の多い者も、自制する者もしない者も、貧しい者も富む者も、同じ者たちから出ているのです。誕生を法で定めた、その者たちからです。9:3 黄道十二宮の図は、神々の作ったものだからです。彼らの言うところでは、そのうちの一つの光が勢いを得ると、ほかの多くのものから誉れを奪います。そして、負けていた者が、今度は勝つのが常なのです。9:4 七つの惑星は、盤の駒で遊ぶ者たちのように、それらを楽しんでいます。しかし、わたしたちは運命よりも上にいます。さまよう悪霊たちのかわりに、さまようことのない、ただひとりの主を学びました。そして、運命に導かれることはないので、運命の法を定めた者たちを退けたのです。9:5 神にかけて、わたしに言いなさい。トリプトレモスが小麦の種をまき、悲しみの後に、アテネの人々に恵みを施すのですか。それなら、なぜデメテルは、娘を失う前には、人間に恵みを施す者とならなかったのですか。9:6 天には、エリゴネの犬が示されています。アルテミスの助け手のさそりも、ケンタウロスのケイロンも、半分に切られたアルゴ船も、カリストの熊もです。9:7 それでは、この者たちが先に述べた行いをする前には、天は飾られていなかったのですか。また、三角座は、ある人々によればシチリアのために星の中に置かれました。ある人々によれば、ゼウスの呼び名の最初の文字です。これを笑わない人がいるでしょうか。9:8 実際、なぜサルディニアやクプロまでもが、天で誉れを受けていないのでしょうか。ゼウスの兄弟たちは、王国を分け合いました。それなのに、なぜ彼らについても、文字をかたどった形が天に据えられていないのでしょうか。9:9 また、縛られ、王国から追い出されたクロノスが、どうして運命の管理者に立てられるのですか。もはや王でない者が、どうして王国を与えるのですか。ですから、このたわごとを捨てなさい。わたしたちを不当に憎むあまり、法に背いてはなりません。

10:1 人間の変身の話が、神話として語られています。ところが、あなたがたのもとでは、神々まで変身するのです。レアは木になり、ゼウスはペルセフォネのために蛇になります。パエトンの姉妹たちはポプラになり、レトはつまらない動物になります。そのために、今のデロスはオルテュギアと呼ばれたのです。10:2 わたしに言いなさい。神が白鳥になり、鷲の姿をとり、ガニュメデスに酒をつがせたことで、少年愛を誇るのですか。贈り物を受け取り、受け取らなければ怒る神々を、どうしてわたしがあがめる必要があるでしょうか。10:3 この者たちが運命を持てばよいのです。わたしは惑星を拝みたくありません。ベレニケの髪とは何ですか。先に述べたその女が死ぬ前には、その星々はどこにあったのですか。死んだアンティノオスが、どうして美しい若者として月に据えられているのですか。10:4 だれが彼を天に上げたのですか。王たちについては、金で雇われた者が、偽りの誓いを立て、神々をあざ笑いながら、王は天に昇ったと言って信じられています。だれかがそれと同じように、この若者をも神として語り、誉れと贈り物を受けたのでなければ、ほかにだれがいるでしょうか。10:5 なぜ、あなたがたは神から奪ったのですか。なぜ、神の創造をはずかしめるのですか。あなたは羊をいけにえにしながら、その羊を拝んでいます。天には牡牛がいるのに、あなたはその姿をほふっています。10:6 ひざまずく者は、悪い獣を踏みつけています。人間を造ったプロメテウスを食い荒らした鷲も、誉れを受けています。白鳥はりっぱなものです。姦通者だったからです。一日おきに生きるディオスクロイも、りっぱなものです。レウキッポスの娘たちをさらった者たちです。10:7 ヘレ

ネはもっとりっぱです。金髪のメネラオスを捨てて、頭飾りを着け、金をたくさん身につけたパリスについて行ったのですから。ソフロンもまた正しい人です。この淫らな女を、エリュシオンの野に移したのですから。10:8 しかし、テュンダレオスの娘も、不死にされたわけではありません。賢いことに、エウリピデスは、先に述べたこの女がオレステスに殺されたことを、劇に持ち込んだのです。

11:1 それなら、運命の管理者たちがこのような者たちだと見ていながら、どうしてわたしが、運命による誕生を受け入れるでしょうか。わたしは王になりたくありません。富むことも望みません。将軍の職は退けました。淫らな行いを憎んでいます。むさぼりのために、船で海に出るわざを修めることはしません。冠を得ようと競うこともしません。名誉を求める狂気からは離れました。死を軽んじます。あらゆる病よりも上に立ちます。悲しみが、わたしの魂を食い尽くすことはありません。11:2 奴隷であれば、奴隷の身分を耐え忍びます。自由人であっても、生まれのよさを誇りません。わたしは、太陽がすべての人に同じであるのを見ています。また、死も、快楽の中にいる者にも、乏しさの中にいる者にも、すべての人に一つであるのを見ています。11:3 富む者が種をまき、貧しい者も、まかれた同じ種にあずかります。最も富む者たちも死に、物乞いする者たちも、いのちの同じ終わりを迎えます。富む者たちは、より多くのものを必要とします。そして、人に信用されて、名声を得ます。しかし、貧しい者、自分の分にかなうものだけを求める最もつつましい者は、求めるものを、もっとたやすく得るのです。11:4 なぜ、あなたは運命に従って、金銭を愛するあまり眠らずにいるのですか。なぜ、運命に従って、何度も欲しがっては、何度も死ぬのですか。世の狂気を退けて、世に対して死になさい。神を知ることによって古い誕生を退け、神に生きなさい。11:5 わたしたちは、死ぬために生まれたのではありません。自分のせいで死ぬのです。自由な意志が、わたしたちを滅ぼしました。自由であったわたしたちが奴隷となり、罪のゆえに売られたのです。神がお造りになったものに、悪いものは一つもありません。悪を生み出したのは、わたしたちです。しかし、生み出した者は、それをふたたび退けることもできるのです。

12:1 わたしたちは、互いに違う二つの霊があることを知っています。一つは魂と呼ばれます。もう一つは魂よりも大きく、神のかたちであり、似姿です。最初の人間たちには、その両方がありました。それは、人間が、ある面では物質的なものであり、ある面では物質を超えたものであるためでした。12:2 それは、こういうことです。世界の造りの全体と、創造のすべてとは、物質から生じたことが分かります。そして、その物質そのものも、神が生み出されたものです。そのため、物質は、区別を受ける前には、ある面で粗く、形のないものと考えられます。また、その中で分けられた後には、ある面で飾られ、よく整ったものと考えられるのです。12:3 ですから、その分けられた中に、物質から成る天と、天にある星々があります。そして、地も、地に属すると考えられるすべてのものも、同じ成り立ちを持っています。そのため、すべてのものに共通の起源があるのです。12:4 このようであっても、物質から成るものには、いくつかの違いがあります。あるものはより美しく、あるものは、それ自体は美しいけれども、もっと優れたものに劣るのです。12:5 実際、体の成り立ちは一つの仕組みに属しています。そして、体が生じた原因も、その体にかかわっています。このようであっても、体の中には、ある尊さの違いがあります。あるものは目、あるものは耳、あるものは髪の飾りです。内臓の配置もあり、骨髄と骨と筋の組み合わせもあります。それぞれが違っていても、響き合う仕組みによって、調和ができています。それと同じように、世界も、より輝かしいものと、それとは似ていないものとを持っています。世界をお造りになったかたの力によるのです。そして、造り主のご意志によって、物質的な霊にあずかったのです。12:6 その一つ一つは、いとも神聖な言葉を、むなしい高ぶりからはねつけない人なら、理解することができます。その言葉は、時がたつにつれて書き記されました。そして、それに心を向ける人々を、深く神に愛される者としてきたのです。12:7 それでも、悪霊たち（あなたがたはそう呼んでいます）も、物質から組み立てられ、物質から出た霊を得ました。そして、放縦で、むさぼる者になったのです。そのうちのある者たちは、より清いほうへ向かいました。ほかの者たちは、物質の劣ったほうを選び、それに似た暮らしをしました。12:8 ギリシヤの人々よ、あなたがたが拝んでいるのは、この者たちです。彼らは物質から生じましたが、よい秩序から遠く離れていることが明らかになりました。実際、先に述べた者たちは、自分たちの愚かさのために、むなしい栄光を求めるほうへ向かい、くつわを振り払いました。そし

て、神性を奪う盗人になろうとしたのです。しかし、万物の主は、彼らが思いのままにふるまうのを許されました。世界が終わりを迎えて解かれ、審判者が来られるときまでです。また、悪霊の反逆にあいながらも、完全な神を知ることを求める人々がいます。その人々がみな、戦いによって、裁きの日に、より完全な証しを受けるときまでです。12:9 ですから、霊は光るものの中にあり、天使たちの中にあり、植物と水の中にあり、人間の中にあり、動物の中にあります。霊は一つであり、同じものですが、その中に違いを持っているのです。12:10 わたしたちがこう語るのは、口先からでも、もっともらしい考えやソフィストの組み立てからでもありません。そうではなく、もっと神聖な声の言葉を用いているのです。学びたい人は、急いで来なさい。12:11 あなたがたは、スクテヤ人アナカルシスをはねつけていません。そのあなたがたは、今も、異民族の律法に従う者たちから教えを受けることに、憤ってはなりません。たとえバビロン人の予言術としてでもよいから、わたしたちの説を用いなさい。たとえ予言する樫の木の声としてでもよいから、わたしたちの語ることに耳を傾けなさい。12:12 いま挙げたものは、狂った悪霊たちが知恵を競って作り出したまやかしです。しかし、わたしたちの教えは、この世の理解を超えています。

13〜16章　魂と霊、悪霊の不死、神のかたち

13:1 ギリシャの人々よ、魂は、それ自体としては不死ではありません。死ぬものです。しかし、その同じ魂が、死なないこともできるのです。実際、真理を知らない魂は、体とともに死に、解かれます。そして、のちに世界の終わりに、体とともによみがえり、不死のうちに、罰による死を受けるのです。13:2 また一方で、神を知るに至った魂は、しばらくのあいだ解かれても、死ぬことはありません。魂は、それ自体としてはやみであり、その中には光るものが何もないからです。そして、これこそが、言われていることなのです。『やみは光をとらえない』（ヨハネ一・五）。13:3 実際、魂が自分で霊を救ったのではありません。魂が霊によって救われ、光がやみをとらえたのです。まことに、ロゴスは神の光であり、知識のない魂はやみです。13:4 そのため、魂は、ひとりで暮らしていると、物質に向かって下へ傾き、肉とともに死にます。しかし、神の霊と結び合わされていれば、助けのないものではありません。霊が導く場所へと上っていくのです。実際、霊の住まいは上にあり、魂の起源は下にあります。13:5 さて、初めは、霊は魂とともに暮らしていました。しかし、霊は、自分に従おうとしない魂を見捨てたのです。魂は、霊の力の火種のようなものを持ちながらも、霊から離れたために、完全なものを見ることができません。そして、神を求めながら、知恵を競う悪霊たちに従い、迷いのうちに多くの神々をかたどったのです。13:6 神の霊は、すべての人のもとにあるわけではありません。正しく生きる人々のもとに下って宿り、その魂と結び合わされて、予言によって、ほかの魂に隠されたことを告げ知らせたのです。そして、知恵に従った魂は、同族の霊を自分のもとに引き寄せました。しかし、従わない魂は、苦しみを受けられた神に仕える者を退けました。そして、神を敬う者というより、神と戦う者として現れたのです。

14:1 ギリシャの人々よ、あなたがたも、そのような者たちです。言葉は巧みでも、考えは奇妙です。そして、ひとりの支配よりも、多くの者の支配を奉じてきました。悪霊たちを強い者と思って、それに従っているのです。14:2 実際、強盗は、人の情を持たないので、大胆さによって、自分に似た者たちを支配するのが常です。悪霊たちも同じです。ひどい悪へと迷い込み、あなたがたのもとでひとりきりになった魂を、無知と幻によって欺いてきたのです。14:3 この悪霊たちは、たやすくは死にません。肉を持たないからです。しかし、生きながら死のわざを行っています。そして、自分に従う者たちに罪を教え込むたびに、彼ら自身も死んでいるのです。14:4 今の彼らには、人間のようには死なないという、まさった点があります。ですから、その点は、彼らが罰を受けようとするときにも、彼らにあるのです。彼らは、永遠のいのちにあずかることはありません。死のかわりに、不死のうちにいのちを受けることはないのです。14:5 わたしたちは、今はたやすく死にます。しかし、のちには、喜びとともに不死を受けるか、不死とともに苦しみを受けるかします。それと同じように、悪霊たちも、今のいのちを、罪を犯すために悪用し、いつも、生きながらも死んでいます。そして、のちには同じ不死を持つことになります。それは、彼らが生きていたときの不死に似ています。しかし、その成り立ちにおいては、ある人間たちの不死に似ているのです。悪霊たちが、生きていたあいだの人間たちに定めたことを、自分から行った人間たちです。14:6 人間は長く生きないので、罪の種類も少ししか芽生えません。しかし、先に述べた悪霊たちは、そのいのちに限りがないので、もっと大きく罪を犯すことになったのではありませんか。

15:1 ですから、わたしたちは、持っていながら失ったものを、今こそ探し求めなければなりません。魂を聖霊と結び合わせ、神との結び合いを得ようと努めなければならないのです。さて、人間の魂は、多くの部分から成り、一つの部分から成るのではありません。組み合わされたものだからです。そのため、体を通して現れるのです。実際、魂は、体なしに現れることはありません。肉も、魂なしによみがえることはありません。15:2 からすのように鳴く者たちは、人間を、知性と知識を受け入れる理性ある動物だと説を立てます。しかし、人間はそうでは

ないからです。実際、彼らの言うとおりなら、理性のない動物も、知性と知識を受け入れるものだということになるでしょう。15:3 人間だけが、神のかたちであり、似姿です。ここで人間と言うのは、動物と同じようなことをする者ではありません。そうではなく、人間の性質を遠く超えて、神ご自身のもとまで進んだ者のことです。15:4 このことについては、『動物について』の中で、もっとくわしく書きました。今は、要となることを述べるべきです。神にかたどったかたちと似姿とは、どのようなものかということです。15:5 比べることのできないものは、存在するものそのものにほかなりません。比べられるものは、それに似たものにほかなりません。さて、完全な神は、肉を持たないかたです。しかし、人間は肉です。魂は肉をつなぎとめる結び目であり、肉は魂を包み保つものです。15:6 このような成り立ちの形が、宮のようであれば、神は、使者である霊によって、その中に住もうとされます。しかし、その幕屋がそのようでなければ、人間が獣にまさるのは、区切って話す声の点だけです。ほかの点では、神の似姿ではないので、獣と同じ暮らしをしているのです。15:7 悪霊たちは、だれも肉を持っていません。彼らの組み立ては霊的なもので、火のよう、空気のようです。神の霊に守られている人々だけが、悪霊たちの体をも、たやすく見ることができます。ほかの人々、つまり魂だけの人々には、決して見えません。15:8 劣ったものは、より優れたものをとらえることができないからです。こういうわけで、悪霊たちの実体には、悔い改めの余地がありません。彼らは、物質と悪の照り返しだからです。15:9 物質は、魂を支配しようとしました。そして、自由な意志によって、悪霊たちは人間に死の法を伝えました。しかし、人間は、不死を失った後に、信仰による死によって死に打ち勝ちました。そして、悔い改めによって、召しが与えられたのです。こう言う言葉のとおりです。『彼らは、御使たちよりも少し低くされたので』（詩篇八・五）[1]。15:10 負けた者はだれでも、死の成り立ちを退けるなら、ふたたび勝つことができます。その成り立ちが何であるかは、不死を望む人々には、たやすく見て取れるでしょう。

16:1 人間に命令する悪霊たちは、人間の魂ではありません。実際、魂が死んだ後にも働くことなど、どうしてできるでしょうか。できるとすれば、人間は生きているあいだは愚かで力がなく、死んでから、もっと強く働く力を受けると信じられる場合だけです。16:2 しかし、そうではありません。ほかのところで示したとおりです。また、体の部分に妨げられている、不死だという魂が、体から移り住んだときには、もっと賢くなると考えるのは難しいことです。16:3 実際、悪霊たちは、自分たちの悪意から人間に向かって荒れ狂います。そして、さまざまな偽りの芝居を仕組んで、下へ傾いた人間の考えをそらすのです。人間が、天への道へと高く上ることができないようにするためです。16:4 しかし、わたしたちは、世にあることを知らずにいるわけではありません。魂を不死にする力がわたしたちのもとに来るなら、神的なものも、わたしたちにはたやすくとらえられます。悪霊たちは、魂だけの人々にも見えることがあります。悪霊たちが、ときに自分から人間に姿を見せるときです。それは、ひとかどの者だと思われるためです。あるいは、心の悪い友として、敵にするように何か害を加えるためです。あるいは、自分たちに似た者たちに、自分たちを敬うきっかけを与えるためです。16:5 実際、もしできるなら、彼らは、天をも、ほかの造られたものとともに、必ず引きずり下ろしていたはずです。しかし今、彼らは決してそうしていません。できないからです。むしろ、下にある物質によって、自分たちに似た物質と戦っているのです。16:6 この者たちに勝とうと思う人は、物質を退ければよいのです。天の霊の胸当で身を固めれば、それに包まれているものを、すべて救うことができるからです。たしかに、わたしたちの中の物質には、病もあり、乱れもあります。しかし、それらが起こると、悪霊たちは、病の苦しみが襲うときに近づいてきて、その原因を自分に帰するのです。16:7 ときには、彼ら自身も、自分たちの愚かさの嵐によって、体の状態を揺さぶります。この悪霊たちは、神の力の言葉に打たれると、恐れて去っていきます。そして、病む人はいやされるのです。

訳注

1 ギリシア語訳の詩篇による。口語訳は『神よりも』と訳す。

17〜19章　魔術と薬、悪霊のいやし、占い

17:1 実際、デモクリトスの説く、引き合う力と退け合う力について、わたしたちに何が言えるでしょうか。言えるのは、ことわざのとおり、アブデラの人間はアブデラ流のたわごとを言う、ということだけではありませんか。17:2 その町に名を与えた者は、人々の言うところでは、ヘラクレスの友でした。そして、ディオメデスの馬に食い尽くされました。それと同じように、魔術師オスタネスを誇る者も、終わりの日に、永遠の火のえじきとして引き渡されるでしょう。17:3 あなたがたも、笑うのをやめなければ、まじない師たちと同じ罰を味わうことになります。ですから、ギリシヤの人々よ、高いところから叫ぶかのようなわたしの声に、耳を傾けなさい。あざけって、自分たちの無分別を、真理を宣べ伝える者になすりつけてはなりません。17:4 病は、退け合う力によって消えるものではありません。狂った人も、小さな皮を身に下げても、いやされはしません。悪霊たちが入り込んでくるのです。病む人も、恋をしていると言う人も、憎む人も、仕返しをしたいと思う人も、悪霊たちを助け手として受け入れるのです。17:5 悪霊たちのたくらみのやり方は、こうです。実際、文字の形も、それでつづった行も、それ自体で、組み立てられた意味を表すことはできません。人間が、自分たちのために、考えのしるしを作ったのです。そして、その組み合わせ方によって、文字の並びがどういう決まりになっているかを知るのです。それと同じように、いろいろな根も、腱や骨を取り合わせることも、それ自体で何かの働きをするものではありません。それは、悪霊たちの悪を組み立てる土台なのです。悪霊たちが、そのそれぞれが何に効くかを定めたのです。17:6 そして、悪霊たちは、人間たちが、それらの物によって仕えてもらうことを受け入れたのを見ます。すると、人間をとらえて、自分たちの奴隷にしてしまうのです。姦淫に仕えることが、どうしてよいことでしょうか。17:7 人がだれかを憎むのに、進み出て手を貸すことが、どうして優れたことでしょうか。狂った人々への助けを、神ではなく物質に帰することが、どうして立派なことでしょうか。悪霊たちは、たくみに人間を神への敬いからそらし、草や根に頼るように仕向けるからです。17:8 もし神が、人間の望むことをさせるためにそれらを備えられたのなら、神は悪いものの造り主だったことになるでしょう。しかし、神ご自身は、よいものをすべてお造りになりました。ところが、悪霊たちのふしだらさが、世にあるものを、悪を行うために用いたのです。この種の悪は彼らに属するもので、完全なかたに属するものではありません。17:9 実際、わたしは、生きているあいだは少しも悪い者ではありません。それなのに、わたしが死んで何もしなくなると、動きも感じもしない亡骸が、どうして感じられる何かを引き起こすのでしょうか。17:10 また、むごい死に方をした者が、どうして、だれかへの仕返しに力を貸すことができるでしょうか。実際、もしそうなら、その者は、なおさら自分で、自分の敵に仕返しをするでしょう。ほかの人々をも助けることができるのなら、なおさら自分のために報いる者となるはずだからです。

18:1 薬を使うことも、そこに含まれるあらゆる種類のものも、同じ仕掛けに属します。実際、物質を信じて、物質によっていやされる人がいるなら、その人は、神の力により頼めば、なおさらいやされるでしょう。18:2 毒が物質の調合であるのと同じように、いやすものも同じ実体だからです。もし、わたしたちが劣った物質を退けるとしても、ある人々は、しばしば、何か悪い物を別の物に混ぜてでも、いやそうと努めます。そして、悪い物を、よいことのために用いることになるのです。18:3 強盗をはたらく者と食事をした人は、自分が強盗でなくても、それでも、食卓をともにしたために罰を受けます。それと同じように、悪い者でない人も、劣った物と交わり、よいとされることのためにそれを用いるとします。その人は、それにあずかったために、さばきをなさる神によって罰せられるでしょう。18:4 実際、物質の仕組みを信じる者が、なぜ神を信じようとしないのでしょうか。なぜ、あなたは、もっと力のある主のもとに行かないのですか。なぜ、むしろ、犬が草で、鹿がまむしで、猪が川の蟹で、獅子が猿でいやすよう

に、自分で自分をいやすのですか。18:5 なぜ、あなたは、世にあるものを神にするのですか。なぜ、隣人をいやすと、恵みを施す者と呼ばれるのですか。言葉の力に従いなさい。悪霊たちはいやしはしません。たくみに人間をとりこにするのです。あの驚嘆すべきユスティノスは、いま挙げた者たちは強盗に似ている、と正しく言い放ちました。18:6 実際、強盗たちは、人を生け捕りにして、それから代価を取って、その人を家族に返すのが常です。それと同じように、神々と思われている者たちも、ある人々の手足に入り込みます。それから、夢を通して、自分たちがそこにいると人々に思わせます。そして、そういう人々に、人前に出て行くように命じます。皆が見ている前で、世のものを楽しんでしまうと、病む人から飛び去ります。自分たちが仕組んだ病を消して、人々をもとどおりにするのです。

19:1 あなたがたは、これらのことを悟っていないのですから、知っているわたしたちから学びなさい。死を軽んじ、自足の生き方を鍛えていると言っていてもです。実際、あなたがたのもとの哲学者たちは、その鍛錬からひどく離れています。何の役にも立たないのに、ローマ人の皇帝から毎年六百枚の金貨を受け取る者もいるほどです。あごひげさえ、ただで伸ばしておくことがないようにするためです。19:2 たとえば、大きな町に巣を作ったクレスケンスは、少年愛ではだれよりもまさり、金銭欲にもすっかりとりつかれていました。死を軽んじるこの者は、死そのものをひどく恐れていました。そのため、ユスティノスを、わたしにもそうしたように、死という悪に陥れようとたくらんだのです。ユスティノスが、真理を宣べ伝えて、哲学者たちが食い意地の張った詐欺師であることを暴いたからです。19:3 ユスティノスが、哲学者のうち、あなたがたのほかのだれを責め立てるのが常だったでしょうか。あなたがたが、わたしたちの説に同意して、死を恐れるべきではないと言うとします。それなら、アナクサルコスのように、人間の名誉を求める狂気から死んではなりません。むしろ、神を知ることのゆえに、死を軽んじる者になりなさい。19:4 実際、世界の造りは美しいのですが、その中の暮らしぶりは劣っています。そして、晴れがましい集まりでのように、神を知らない者たちが喝采を浴びているのを見ることができます。実際、占いとは何でしょうか。19:5 なぜ、あなたがたは、それに惑わされているのですか。占いは、あなたにとって、世にあるむさぼりに仕えるしもべです。あなたは戦争をしたいと思い、アポロンを殺し合いの相談役にします。娘をさらいたいと思い、悪霊に加勢してもらうことを選びます。19:6 あなたは、自分のせいで病気になっています。それなのに、アガメムノンが十人の相談役を望んだように、神々が自分とともにいてほしいと望むのです。ある女が水を飲んで狂い、乳香によって正気を失います。すると、あなたは、そのような女が予言していると言うのです。19:7 アポロンは、先のことを知る者で、予言する者たちの教師でした。それなのに、ダフネのことでは、自分を欺いたのです。わたしに言いなさい。樫の木は予言し、鳥たちも予告するのに、あなたは動物や草木よりも劣っているのですか。19:8 それなら、あなたは、予言する木になり、空を行く鳥の飛ぶ力を身につけるのがよいわけです。あなたを金銭好きにする者が、富むことについても、あなたに予言します。争いと戦いを起こす者が、戦争での勝利についても予告するのです。19:9 あなたが情念よりも上にいるなら、世にあるすべてのものを軽んじるでしょう。あなたがたは、そのような者であるわたしたちを、忌み嫌ってはなりません。そうではなく、悪霊たちを退けて、ただひとりの神に従いなさい。『すべてのものは、神によってできた。一つとして神によらないでできたものはなかった』（ヨハネ一・三）。19:10 もし、生え出るものの中に毒もあるとすれば、それは、わたしたちの罪深さのために、後から加わったのです。わたしは、これらのことの姿を示すことができます。ただ、あなたがたは耳を傾けなさい。そうすれば、信じる人は悟るでしょう。

20〜23章　魂の翼、神話の寓意、見せ物

20:1 あなたがたが薬でいやされるとします。大目に見て、あなたにそれを許します。それでも、あなたは、その証しを神に帰さなければなりません。世が、まだわたしたちを下へ引きずり降ろしており、わたしは弱さのために物質を求めてしまうからです。20:2 実際、魂の翼は、完全な霊なのです。魂は、罪のためにそれを投げ捨て、ひな鳥のように飛んで、地に落ちました。そして、天の交わりから離れて、劣ったものにあずかることを慕い求めたのです。20:3 悪霊たちは住まいを移され、最初に造られた人々は追い出されました。悪霊たちは、天から投げ落とされました。最初の人々は、地から追い出されましたが、この地からではありません。ここにある秩序よりもすぐれた地からです。20:4 ですから、これからは、わたしたちは、もとの姿を慕い求めて、妨げになるものをすべて退けなければなりません。実際、人よ、天は限りのないものではなく、限られていて、果てがあるのです。天を越えたところにあるのは、よりすぐれた世々です。そこには、いろいろな病のもとになる季節の移り変わりはありません。よい気候をことごとく備えていて、絶えることのない昼と、この地の人間には近づきがたい光とがあるのです。たしかに、地理の書を苦心して著した人々は、人間にできるかぎり、土地の記録を作りました。しかし、その向こうのことは、見ることができないために語れず、ほかのことのせいにしました。引き潮があることや、海の一方は海藻に、一方は泥に満ちていることです。また、土地の一方が燃えるように熱く、一方が冷たく凍りついていることです。20:5 しかし、わたしたちは、自分たちの知らなかったことを、預言者たちを通して学びました。預言者たちは、ほかの魂が知らなかったことを、ことごとく予告しました。死ぬべきものの上に着る衣が天の霊を得る[1]ことを、魂のうちに確信していたからです。20:6 裸でいる人はだれでも、この飾りを手に入れて、もとのつながりへと駆け戻ることができます。

21:1 実際、ギリシヤの人々よ、わたしたちは愚かなのではありません。神が人の姿でお生まれになったと告げ知らせても、たわごとを語っているのではないのです。わたしたちをののしる人々よ、あなたがたの神話を、わたしたちの語ることと比べてみなさい。人々の言うところでは、アテナは、ヘクトルのことでデイポボスになりました。髪を切らないポイボスは、アドメトスのために、足をくねらせて歩く牛を飼いました。ゼウスの妻は、老婆となってセメレのもとに行きます。21:2 このような話に励んでいながら、どうしてわたしたちをあざ笑うのですか。あなたがたのアスクレピオスは死にました。テスピアイで一夜のうちに五十人のおとめを犯した者も、自分を火のえじきに引き渡して、去って行きました。プロメテウスは、カウカソスに縛りつけられ、人間に恵みを施したために罰を受けました。21:3 あなたがたによれば、ゼウスはねたみ深く、人間が滅びるのを望んで、夢を人間から隠します。ですから、自分たちの記録に目を向けて、せめて、同じように物語る者として、わたしたちを受け入れなさい。それに、わたしたちは正気を失ってはいません。たわごとなのは、あなたがたの話のほうです。21:4 あなたがたが神々の誕生を語るなら、神々が死ぬものであることも示すことになります。実際、なぜ、ヘラは今は身ごもらないのですか。年を取ったのですか。それとも、あなたがたにそれを知らせた者を失ったのですか。ギリシヤの人々よ、今、わたしの言うことを聞き入れなさい。あなたがたの神話も神々も、寓意で解いてはなりません。21:5 そんなことをしようとすれば、あなたがたの神々の神性は、あなたがた自身によっても滅ぼされてしまうからです。実際、あなたがたのもとの悪霊たちは、語られているとおりの者であれば、性質の劣った者たちです。あるいは、自然の理のほうへ移し替えられれば、語られているとおりの者ではありません。21:6 わたしは、元素の実体をあがめるように説き伏せられることはありませんし、隣人を説き伏せることもしないでしょう。ランプサコスのメトロドロスも、ホメロスについての書の中で、すべてを寓意に移して、ひ

どく愚かな論じ方をしています。21:7 実際、彼は、ヘラもアテナもゼウスも、彼らのために囲いと神域を設けた人々の考えるようなものではない、と言います。それは自然の実体であり、元素の配置である、と言うのです。21:8 そして、あなたがたは、こう言うことになるでしょう。ヘクトルも、もちろんアキレウスもアガメムノンも、同じ自然のものだ、と。ひと言で言えば、ヘレネとパリスとともに、ギリシヤ人も異民族もみなそうだ、と。彼らは筋立てのために持ち込まれただけで、いま挙げた人間はひとりもいなかったのだ、と。21:9 わたしたちがこれらのことを持ち出したのは、仮に置いてみただけです。神についてのわたしたちの理解は、物質と泥の中を転げ回る者たちと比べることさえ、許されないからです。

22:1 実際、あなたがたの教えも、なんというものでしょうか。あなたがたが国を挙げて催す晴れがましい集まりを、だれがあざけらずにいられるでしょうか。それは、悪い悪霊たちを口実に行われて、人々を恥辱に陥れるのです。22:2 わたしは、ある者をしばしば見ました。見て驚き、驚いた後で、さげすみました。その者は、内側では別の人間なのに、外側では自分でないものを偽っているのです。ひどく気取って、あらゆる仕方で身をくねらせていました。目をきらめかせたり、両手をしなわせたりしていました。土の顔をして、神がかりのようにふるまい、あるときはアフロディテに、あるときはアポロンになっていました。神々すべてを、ただひとりで告発する者、迷信の縮図、英雄たちの行いをそしる者、殺人を演じる者です。姦淫を書き留める者、狂気の宝庫、男娼の教師、人が罪に定められるきっかけです。そして、そういう者が、皆からほめそやされていたのです。22:3 しかし、わたしは、すべてを偽るこの者を退けました。その者が神をないがしろにすることも、そのわざも、その人間そのものもです。ところが、あなたがたは、こういう者たちにとりこにされています。そして、あなたがたの営みに加わらない者たちを、ののしるのです。22:4 わたしは、大勢が歌うのに、口を開けて見とれたいとは思いません。身ぶりで合図したり、自然に反して体を動かしたりする者と、同じ気持ちにさせられたくもありません。あなたがたのもとで、何か驚くべきこと、選り抜きのことが行われているでしょうか。彼らは、恥ずべきことを鼻で吹き鳴らし、してはならない動き方をします。そして、どうやって姦淫するかを舞台で教え込む者たちを、あなたがたの娘たちや息子たちが見物しているのです。22:5 あなたがたのもとの、聴衆の集まる場所は立派なものです。夜にあくどく行われることを、すべて言いふらし、恥ずべき言葉を声高に語って、聞き手を楽しませるのですから。あなたがたの詩人たちも立派なものです。偽りを語り、言葉のあやで聞き手を欺くのですから。

23:1 わたしは、体の鍛錬のために重くなり、自分の肉という荷を持ち運ぶ人間たちを見ました。競技の主催者たちが彼らを呼び招き、彼らには賞品と冠が用意されています。それは勇ましい行いに与えられるのではありません。乱暴と争いを競うことに与えられるのです。そして、よけいに殴る者が冠を受けるのです。23:2 これらは、悪のうちでもまだ小さいほうです。しかし、もっと大きな悪は、だれが口に出すのをためらわずにいられるでしょうか。ある人々は、放蕩のために、怠けて暮らすことを選び、殺されるために自分を売ります。貧しく苦しむ者が自分を売り、富む者が、殺す者たちを買うのです。23:3 そして、その人々のために、証人となる者たちが座に着きます。闘う者たちは、何のためでもなく一騎打ちをし、助けに降りて来る者はいません。いったい、こういうことが、あなたがたによって立派に行われているのでしょうか。実際、あなたがたの中で上に立つ者は、強盗どもを養うと言い立てて、人殺しの軍勢を集めます。強盗をはたらく者たちは、その人のもとから出て来ます。そして、あなたがたは皆、見物に集まり、競技の主催者の悪をも、一騎打ちをする者たち自身をも審判する者になるのです。23:4 人殺しの場に居合わせなかった者は悲しみます。悪く、神をないがしろにする、汚れた行いの見物人になる、という判決を受けなかったからです。あなたがたは、肉を食べるために動物を犠牲にします。そして、魂に人の肉を食べさせるために人間を買い、このうえなく神をないがしろにする流血で、魂を養っているのです。23:5 つまり、強盗は奪うために殺し、富む者は、殺されるために剣闘士を買うのです。

訳注

1 『不死を』を加え、天の霊が不死を得ると読む写本もある。

24〜27章　芝居と哲学者、ギリシャ人の学問

24:1 エウリピデスの劇で狂乱し、アルクマイオンの母殺しを語って聞かせる者が、わたしにとって何の益になるでしょうか。その者は、自分にふさわしい姿さえ持っていません。大きく口を開け、剣を振り回し、叫びながら燃え上がり、人間離れした衣をまとっているのです。24:2 アクシラオスの作り話も、消えうせればよいのです。あの者と同じたぐいの言葉で詩を作るメナンドロスもです。なぜ、わたしが、神話の笛吹きに見とれなければならないのでしょうか。また、なぜ、アリストクセノスにならって、テーバイの人アンティゲニデスのことを詮索しなければならないのでしょうか。24:3 わたしたちは、役に立たないものをあなたがたに譲ります。あなたがたも、わたしたちの説に従いなさい。そうでなければ、同じように、あなたがたのものから身を引いて、わたしたちに譲りなさい。

25:1 あなたがたのもとの哲学者たちは、何か大きなこと、驚くべきことをしているでしょうか。実際、彼らは片方の肩をあらわにしたままにし、髪を長く垂らし、ひげを伸ばし、獣の爪を持ち歩いています。そして、何も必要としないと言いながら、プロテウスのように、ずだ袋のために革なめしを必要とします。外套のために機織りを、杖のために木こりを必要とし、大食のために富む者たちと料理人をも必要とするのです。25:2 犬をまねる人よ、あなたは神を知らず、理性のない模倣に移ってしまいました。人前でもっともらしく叫び立てては、自分で仕返しをし、もらえなければ、ののしります。そして、哲学することが、あなたにとって稼ぐための技術になっているのです。25:3 あなたはプラトンの説に従います。すると、エピクロスにならって詭弁を弄する者が、声高にあなたに立ち向かいます。また、あなたはアリストテレスにならう者になろうとします。すると、だれかがデモクリトスにならって、あなたをののしります。25:4 ピュタゴラスは、自分はエウフォルボスであったと言い、フェレキュデスの説を受け継いでいます。ところが、アリストテレスは魂の不死をそしります。あなたがたは、説を受け継ぐ系統が党派に割れており、自分たちは食い違ったまま、互いに一致している者たちと争うのです。25:5 ある者は、神は体であると言いますが、わたしは体を持たないと言います。ある者は、世界は滅びないと言いますが、わたしは滅びるものだと言います。世界の焼尽は時を定めて何度も起こると言いますが、わたしはただ一度だと言います。裁き手はミノスとラダマンテュスだと言いますが、わたしは神ご自身だと言います。魂だけが不死にされると言いますが、わたしは、魂とともにある肉もそうだと言います。25:6 ギリシャの人々よ、わたしたちが、あなたがたにどんな害を加えているでしょうか。なぜ、神のロゴスに従う者たちを、最も汚れた者たちのように憎んできたのですか。わたしたちのもとでは、人の肉を食べることはありません。そう言うように教え込まれたあなたがたが、偽りの証人になったのです。あなたがたのもとでは、ペロプスが、ポセイドンに愛された者でありながら、神々の食事になります。クロノスは息子たちを食べ尽くし、ゼウスはメティスを飲み込みます。

26:1 よその言葉を、戦利品のように見せびらかすのはやめなさい。カラスのように、自分のものでない羽で身を飾るのもやめなさい。どの町も、自分の言い回しをあなたがたから取り戻すなら、あなたがたの詭弁は力を失ってしまうでしょう。26:2 あなたがたは、神とはだれかを探し求めながら、自分のうちにあるものを知りません。天に向かって口を開けたまま、穴に落ちるのです。あなたがたの書物の組み立ては迷宮に似ており、それを読む者たちは、ダナオスの娘たちの甕に似ています。26:3 なぜ、わたしに向かって時を分け、一部は過ぎ去ったもの、一部は今のもの、一部はこれから来るものだと言うのですか。実際、今のものがあるなら、どうして、これから来るものが過ぎ去ることができるでしょうか。26:4 船が進んでいるとき、乗っている人々は、無知のために、山々が走っていると思います。それと同じように、あなたがたも知らないのです。走り過ぎていくのはあなたがたのほうです。世は、それをお造りになったかたが、あるようにと望まれるかぎり、とどまっているのです。26:5 実際、なぜ、わたしは、自分の考

えを述べると訴えられ、あなたがたは、わたしのものをすべて打ち壊そうと急ぐのですか。そもそも、あなたがたも、わたしたちと同じ仕方で生まれ、同じ世界の治めにあずかってきたのではありませんか。26:6 なぜ、知恵はあなたがたのもとにだけあると言い張るのですか。あなたがたは、ほかの太陽を持っているわけではありません。ほかの星の巡りも、よりすぐれた誕生も、ほかの人間と比べて特別な死も持っていないのです。文法家たちが、あなたがたのたわごとの始まりになりました。知恵を切り分ける者たちよ、あなたがたは、真実の知恵から切り離されてしまいました。そして、部分の名を人間に割り当てました。あなたがたは神を知りません。そして、自分たちどうしで戦って、互いに倒し合っているのです。26:7 そのため、あなたがたは皆、何ものでもありません。言葉を自分のものにしながら、目の見えない者が耳の聞こえない者と話すように語り合っています。なぜ、建てることを知らないのに、大工の道具を手にしているのですか。なぜ、行いから遠く離れていながら論を唱え、名声には思い上がり、災いの中では縮こまるのですか。26:8 あなたがたは、道理に外れた仕方で身なりを用いています。実際、人前では練り歩きながら、論のほうは隅に隠しているのです。わたしたちは、あなたがたがそういう者だと知って、捨て去りました。もうあなたがたのものには触れず、神のロゴスに従っています。26:9 実際、人よ、なぜ、文字の戦いを仕掛けるのですか。もっと自然に話すべきなのに、なぜ、アテネ人の舌足らずな話し方で、拳闘のように文字の発音をぶつけ合わせるのですか。26:10 というのも、アテネ人でもないのにアッティカ風に話すのなら、なぜドーリス風に話さないのか、その理由をわたしに言いなさい。どうして、一方はより異民族の言葉のように聞こえ、もう一方は語らいにより心地よく思えるのですか。

27:1 もしあなたが、あの人々の教養にしがみついているのなら、なぜ、自分の望む説を選ぶわたしと争うのですか。実際、強盗のことは、訴えられた名だけでは罰せず、真実を詳しく確かめてから罰します。ところが、わたしたちのことは、調べもしないののしりの先入観で憎んできました。これがどうして筋の通らないことでないでしょうか。27:2 ディアゴラスはアテネ人でした。ところが、あなたがたは、彼がアテネ人の秘儀を暴いたので、罰しました。そして、彼のフルギヤの書を読みながら、わたしたちを憎んできたのです。あなたがたは、レオンの覚え書きを持っていながら、わたしたちからの反論には不快になります。アピオンのエジプトの神々についての考えを手もとに持ちながら、わたしたちを、最も神を知らない者として追い払うのです。27:3 あなたがたのもとでは、オリュンポスのゼウスの墓が示されています。たとえ、だれかがクレテ人はうそをつくと言うとしてもです。多くの神々の集まりなど、何ものでもありません。神々を軽んじるエピクロスが、松明持ちを務めるとしましょう。それでも、わたしは、神と万物について持っている理解を、支配者たちに少しも隠しはしません。27:4 なぜ、わたしに、自分の生き方を偽るように勧めるのですか。また、なぜ、自分は死を軽んじると言いながら、うまく立ち回って死を逃れるように説くのですか。わたしは鹿の心を持っていません。しかし、あなたがたの言葉のわざは、口に締まりのないテルシテスのようになっています。27:5 太陽は真っ赤に焼けた塊で、月は土だと言う者を、どうしてわたしが信じられるでしょうか。こういうことは、言葉の競い合いであって、真理を整えて示すことではないからです。また、ヘラクレスの物語についてのヘロドロスの書物を信じるのは、どうして愚かでないでしょうか。それらの書物は、上に地があると触れ回り、ヘラクレスに殺された獅子はそこから降りて来たと言うのです。27:6 アッティカ風の言い回し、哲学者たちの積み重ね論法、もっともらしい三段論法、大地の測量、星々の位置、太陽の運行。これらが、何の役に立つでしょうか。そのような探求にかかずらうのは、自分で自分に説を法として定める者のすることだからです。

28〜32章　掟の食い違い、わたしの回心、ホメロスの年代

28:1 そのため、わたしは、あなたがたのもとの法の定めをも、正しくないと判断しました。実際、すべての人の生き方は、一つで共通であるべきでした。ところが今は、町の種類があるだけ、法の定めもあります。そのため、ある人々のもとで恥ずべきことが、別の人々のもとでは優れたこととされているのです。28:2 たとえば、ギリシャ人は、母と交わることを避けるべきことと考えます。ところが、ペルシャ人の魔術師たちのもとでは、そのようなことが最も立派なわざとされています。また、少年愛は、異民族のもとでは罰せられますが、ローマ人からは特別な扱いに値するとされています。彼らは、放牧の馬の群れのように、少年たちの群れを集めようと努めているのです。

29:1 わたしは、これらのことを見たうえに、さらに秘儀にもあずかりました。また、あらゆる人々の祭儀を試してみました。それらは、女のような男たちや、男とも女ともつかない者たちが営むものでした。ローマ人のもとでは、彼らのラティアリスのゼウスが、人間の流血と、人殺しから出る血を喜んでいるのを見いだしました。大きな町から遠くないところでは、アルテミスが、同じたぐいの行いを身に帯びていました。ほかの悪霊も、それぞれの場所で、悪事を次々と引き起こしていました。そこで、わたしは自分自身に立ち返り、どうすれば真理を見いだせるかを探し求めたのです。29:2 優れたことを思い巡らしているうちに、わたしは、ある異民族の書物に出会いました。それは、ギリシャ人の説と比べればより古く、彼らの迷いと比べればより神にかなうものでした。そして、わたしはこの書物を信じるようになりました。言葉づかいにうぬぼれがなく、語った人々にわざとらしさがなかったからです。また、万物の創造がたやすく理解でき、これから起こることが前もって告げられていたからです。さらに、戒めが並はずれてすぐれており、すべてのものをただひとりのかたが治められると説いていたからです。29:3 わたしの魂が神に教えられたとき、わたしは悟りました。ギリシャ人の書物は断罪に導くものであり、この書物は世にある隷属を解くものだということをです。この書物は、多くの支配者と数えきれない暴君から、わたしたちを引き離します。そして、わたしたちに与えるのは、まだ受けていなかったものではありません。そうではなく、受けていながら、迷いのために持つことを妨げられていたものなのです。

30:1 そこで、わたしは、これらのことの理解に導き入れられ、それを得ました。それで、迷いを、乳飲み子の幼稚なもののように脱ぎ捨てたいと思います。わたしたちは、悪の成り立ちが、ごく小さな種の成り立ちに似ていることを知っているからです。悪は、わずかなきっかけによって強くなりました。しかし、わたしたちが神の言葉に従い、自分自身を散らさなければ、ふたたび解かれるのです。30:2 実際、神は、ある隠された宝によって、わたしたちのものを手中に収められました。わたしたちは、その宝を掘りながら、ちりにまみれました。しかし、その宝には、わたしたちのもとにとどまるきっかけを与えているのです。その宝のすべてを持ち物として受け入れる者は、より尊い富を思いのままにする力を手に入れたからです。30:3 さて、これらのことは、わたしたちの身内の者たちに向けて言ったことにしておきます。しかし、ギリシャ人であるあなたがたには、ほかに何を言うことがあるでしょうか。ただ、より優れた者たちをののしってはなりません。彼らが異民族と呼ばれるとしても、それをあざけりのきっかけにしてはならないのです。30:4 実際、すべての人が互いの言葉を聞き分けられない原因を、あなたがたは、望むなら見いだせるでしょう。わたしたちのことを調べたいと望む人々に、わたしはわかりやすく、惜しみなく説明するからです。

31:1 今、わたしは、わたしたちの哲学がギリシャ人のもとのわざよりも古いことを示すのが、ふさわしいと考えます。わたしたちにとって、モーセとホメロスが目じるしとなるでしょう。二人とも、それぞれの側で、ほかの人々より古いからです。ホメロスは詩人や歴史家たちより古く、モーセはあらゆる異民族の知恵の創始者です。31:2 では、この二人を、今、わたしたちが比べるために取り上げ

ることにしましょう。わたしたちのもとにあるものが、ギリシャ人の教養より古いだけでなく、文字の発明よりもさらに古いことが分かるからです。31:3 証人として、わたしは身内の者を立てず、むしろギリシャ人を助け手として用います。身内の者を立てるのは、あなたがたにも受け入れられないので、愚かなことだからです。しかし、あなたがたの武器で立ち向かい、疑いようのない証拠をあなたがたから得るなら、それは驚くべきことになるでしょう。31:4 実際、ホメロスの詩と、その家系と、彼が盛んであった時代については、最も古い人々がすでに調べています。カンビュセスのころの人であるレギオンのテアゲネス、タソスのステシンブロトスとコロフォンのアンティマコスです。また、ハリカルナッソスのヘロドトスとオリュントスのディオニュシオスです。その後に、キュメのエフォロスとアテネのフィロコロス、ペリパトス派のメガクレイデスとカマイレオンがいます。さらにその後に、文法家のゼノドトス、アリストファネス、カリマコス、クラテスがいます。エラトステネス、アリスタルコス、アポロドロスもです。31:5 このうち、クラテスは、ホメロスが盛んであったのはヘラクレスの子孫たちの帰還より前だと言います。トロイア戦争の後八十年以内です。エラトステネスは、トロイアの陥落から百年目の後だと言います。アリスタルコスは、イオニア植民のころだと言います。これは、トロイア戦争の百四十年後のことです。フィロコロスは、イオニア植民の後、アテネでアルキッポスが執政官であったとき、トロイア戦争より百八十年後だと言います。アポロドロスは、イオニア植民の百年後だと言います。これは、トロイア戦争より二百四十年後になるでしょう。31:6 ある人々は、ホメロスがいたのはオリュンピア紀の九十年前、つまりトロイアの陥落の後三百十七年[1]だと言いました。ほかの人々は、時代をもっと下げ、ホメロスはアルキロコスと同じころの人だと言いました。アルキロコスが盛んであったのは第二十三オリュンピア紀のころ、リュディアのギュゲスの時代で、トロイア戦争の五百年後です。31:7 先に述べた詩人、つまりホメロスの時代と生い立ちと、彼について語った人々の食い違いについては、これで十分です。詳しく調べることのできる人々のために、要点だけを述べたことにしておきます。31:8 実際、語り伝えられている事柄についての考えも、偽りだと示すことができるのです。年代の記録につじつまの合わない人々のもとでは、歴史のことも真実を語ることができないからです。31:9 そもそも、書くときに誤りが生じる原因は、真実でないことを組み立てること以外に、何があるでしょうか。

32:1 わたしたちのもとには、むなしい栄光への欲望はなく、さまざまな説を用いることもしません。わたしたちは、世間に広まった地上の言葉から離れ、神の戒めと不朽の父の法に従っています。そのうえで、人間の考えにかかっているものを、すべて退けるからです。32:2 また、哲学しているのは富む者たちだけではありません。貧しい者たちも、ただで教えを受けています。神から来るものは、世にある贈り物で報いることのできる程度を超えているからです。32:3 わたしたちは、聞きたいと望む者を、このようにすべて受け入れます。老女であっても、若者であってもです。わたしたちのもとでは、どの年齢の人も、例外なく敬われます。そして、みだらなことは遠く離れています。32:4 わたしたちは、語るときに偽りを言いません。あなたがたが不信仰に居座り続けることに、終わりがあるなら、それはよいことです。そうでなければ、わたしたちのものが、神のみこころによって確かにされたままであればよいのです。32:5 あなたがたは、笑っていなさい。いずれ泣くことになるのですから。実際、あなたがたのもとでは、ネストルが感嘆されています。老いの弱さと鈍さのために、馬の引き綱をのろのろと切っていたのに、若者たちと同じように戦おうとしたからです。ところが、わたしたちのもとで老いと格闘しながら神のことに取り組む人々は、笑われるのです。これがどうして筋の通らないことでないでしょうか。32:6 また、あなたがたは、アマゾンたちやセミラミスなど、何人かの女たちが戦士であったと言います。それなのに、わたしたちのもとのおとめたちをののしります。だれがこれを笑わずにいられるでしょうか。アキレウスは若者でしたが、非常に気高かったと信じられています。ネオプトレモスはもっと若かったのですが、強い者でした。フィロクテテスは弱っていましたが、トロイアに立ち向かうために、悪霊が彼を必要としました。32:7 テルシテスは、どのような者だったでしょうか。それでも、彼は兵を率いていました。もし無知のために口に締まりがないということがなかったなら、頭がとがって髪が薄いとそしられることもなかったでしょう。わたしたちのもとで哲学したいと望む人々を、わたしたちは、だれであれ見た目で判断しません。近づいて来る人々を身なりで裁くこともしません。心の強さは、

たとえ体が弱くても、すべての人のうちにありうると考えているからです。ところが、あなたがたのものは、ねたみと、ひどい愚かさに満ちています。

訳注

1 この二つの年数は推定による。写本は、陥落の後『四百九十年』とだけ読む。

33〜36章　ギリシャ人の像、異民族の哲学、モーセの古さ

33:1 そのため、わたしは、あなたがたのもとで尊いとされているものから示そうと心に決めました。わたしたちのものは慎みを保ち、あなたがたの習わしはひどい狂気にとらわれていることをです。実際、あなたがたは、わたしたちが女や少年、おとめや老人の中でたわごとを言っていると言います。そして、わたしたちがあなたがたと共にいないからといって、あざけります。そのような人々よ、ギリシャ人のもとの事柄のたわごとを聞きなさい。33:2 そのわざは、あなたがたのもとの神々よりも大いに重んじられていながら、たわごとだからです。また、あなたがたは、女たちのことで見苦しいふるまいをしています。実際、リュシッポスはプラクシラを青銅で造りました。彼女は、詩で何一つ役に立つことを言わなかったのにです。メネストラトスはレアルキスを、シラニオンは遊女サッフォーを、ナウキュデスはレスボスのエリンナを造りました。ボイスコスはミュルティスを、ケフィソドトスはビュザンティオンのミュロを造りました。ゴンフォスはプラクシゴリスを、アンフィストラトスはクレイトを造りました。33:3 そもそも、アニュテや、テレシラ、ミュスティスについて、わたしが何を言うことがあるでしょうか。実際、アニュテの像の作者はエウテュクラテスとケフィソドトスです。テレシラの像はニケラトス、ミュスティスの像はアリストドトスです。エペソのムネシアルキスの像はエウテュクラテスが造りました。コリンナの像はシラニオン、アルゴスのタラルキスの像はエウテュクラテスです。33:4 わたしは、これらの女たちを挙げようと心に決めました。わたしたちのもとで何か珍しいことが行われている、とあなたがたが思わないためです。また、目の前にあるわざを比べて、わたしたちのもとで哲学する女たちをあざけらないためです。サッフォーは、恋に狂った娼婦のような女で、自分のふしだらを歌っています。しかし、わたしたちのもとの女たちは、みな慎みを保っています。おとめたちは糸巻き棒のそばで、神にかなう言葉を口にします。あなたがたのもとのあの娘より、ずっと優れたしかたでです。33:5 だから、恥じなさい。あなたがたは、女たちの弟子であることが明らかです。それなのに、わたしたちと共に生きる女たちを、その晴れがましい集まりもろとも、あざけっているからです。そもそも、グラウキッペは、どんな尊い子をあなたがたにもたらしたのでしょうか。彼女は怪物を産みました。それは、彼女の像が示すとおりです。その像は、アテネの生まれで、エウクテモンの子のニケラトスが青銅で造りました。33:6 実際、彼女が象を身ごもったとしても、グラウキッペが公の誉れを受ける理由は、どこにあるのですか。プラクシテレスとヘロドトスは、遊女フリュネをあなたがたのために造りました。エウテュクラテスは、誘惑した男によって身ごもったパンテウキスを、青銅で造りました。33:7 パイオニア人の女王ベサンティスは、黒い子を身ごもりました。そのために、デイノメネスは、自分の技によって彼女が記憶されるようにしました。わたしは、エウロペを雄牛の上に据えたピュタゴラスをも、断罪します。また、ゼウスを訴えるこの者を、その技のゆえに敬ってきたあなたがたをもです。33:8 ミュロンの腕前も、わたしは笑います。彼は子牛を造り、その上にニケを据えました。その牛が、アゲノルの娘をさらって、姦淫と放縦の賞を得たからだというのです。遊女グリュケラと、竪琴弾きの女アルゲイアは、オリュントスのヘロドトスが造りました。33:9 ブリュアクシスは、パシファエの像を立てました。あなたがたは、彼女のふしだらを記念して、今の女たちもそのようであることを、望んできたも同然です。メラニッペという、ある賢い女がいました。そのため、リュシストラトスは彼女の像を造りました。それなのに、あなたがたときたら、わたしたちのもとに賢い女たちがいることを信じてこなかったのです。

34:1 なるほど、暴君ファラリスも、たいそう尊い者です。彼は乳飲み子を食らっていました。それなのに、アンブラキアのポリュストラトスの作品によって、今に至るまで、驚くべき人物のように示されています。アクラガスの人々は、人を食らったことのために、いま述べたような彼の顔を見ることを恐れてい

ました。ところが、教養に心を砕く人々は、像によって彼を眺めることを誇っているのです。34:2 実際、兄弟殺しがあなたがたのもとで敬われているのは、どうしてひどいことでないでしょうか。あなたがたは、ポリュネイケスとエテオクレスの像を見ていながら、それを造ったピュタゴラスもろとも穴に葬らないのです。悪の記念を、跡形もなく滅ぼしなさい。34:3 三十人の子を産んだ女がいます。ペリクリュメノスの作だからといって、それを驚くべき作品のように考えて眺める必要が、わたしにあるでしょうか。ひどい放縦の戦利品を持ち帰った女は、忌み嫌うのがよかったからです。彼女は、ローマ人のもとの雌豚に比べられます。その雌豚も、同じようなことのために、人々の言うところでは、より秘儀めいた崇拝に値するとされているのです。34:4 アレスはアフロディテと姦淫しました。そして、アンドロンは、二人から生まれたハルモニアを、あなたがたのために造りました。ソフロンは、たわごとやむだ話を書き物で伝えたのに、青銅の像のために、いっそう名高くなりました。その像は、今に至るまであるのです。34:5 また、うそつきのアイソポスを、いつまでも記憶され、大いにもてはやされる者にしたのは、その作り話だけではありません。アリストデモスの彫った像もそうしたのです。それなら、どうして恥じないのですか。あなたがたは、何の役にも立たない女詩人をこれほど多く抱えています。数えきれない娼婦とよこしまな男たちも抱えています。それなのに、わたしたちのもとの女たちの尊さをそしっているのです。34:6 エウアンテがペリパトスで子を産んだと知ることに、わたしにとって、どんな優れたことがあるでしょうか。カリストラトスの技に口をあけて見とれ、カリアデスのネアイラに目を向けることにもです。ネアイラは遊女だったからです。34:7 ライスは身を売り、トゥルノスは彼女を淫行の記念にしました。どうして、あなたがたは、ヘファイスティオンの淫行を恥じないのですか。たとえフィロンが、彼をたいへん巧みに造っているとしてもです。また、レオカレスは、男とも女ともつかないガニュメデスを造りました。どういうわけで、あなたがたは、これを何か優れた持ち物のように敬ってきたのですか。34:8 また、プラクシテレスは、汚された女を造りました。あなたがたは、このようなものをすべて退けて、真に優れたものを求めるべきでした。フィライニスやエレファンティスの口にできない工夫を取り入れながら、わたしたちの生き方を忌み嫌うべきではなかったのです。

35:1 さて、わたしがこれらのことを述べたのは、ほかの人から学んでのことではありません。わたしは多くの土地を巡り歩きました。あるときは、あなたがたの学問をソフィストとして教えました。あるときは、多くの技と工夫に出会いました。最後には、ローマ人の町に滞在し、あなたがたのもとから彼らのもとに運ばれた、さまざまな像をよく調べました。わたしは、多くの人の習わしのように、他人の考えで自分の言うことを固めようとはしないからです。そうではなく、自分で見て理解したすべてのものについて、その記録をまとめたいのです。35:2 そこで、わたしは、ローマ人の大言壮語に別れを告げました。アテネの人々の味気ないおしゃべり、つまりつじつまの合わない説にもです。そして、わたしたちの異民族の哲学を自分のものとしたのです。この哲学が、あなたがたのもとのわざよりどのように古いかを、わたしは書き始めました。しかし、差し迫った話のために、あと回しにしました。今、ちょうどよい時なので、この哲学の説について語ってみることにします。35:3 実際、わたしたちの教えを不快に思ってはなりません。また、たわごとと悪ふざけに満ちた反論を、わたしたちに向けて組み立ててはなりません。「タティアノスは、ギリシャ人を越え、数えきれない哲学者の群れを越えて、異民族の説で新しいことをしている」と言ってです。35:4 そもそも、無知であることが明らかになった人々が、同じような人間によって、今、論駁されることの、何がひどいのでしょうか。また、あなたがたの身内のソフィストの言うとおり、いつもすべてを教えられながら老いていくことの、何がおかしいのでしょうか。

36:1 それはともかく、ホメロスはトロイア戦争より後の人ではないことにしておきます。そうではなく、その戦争の時そのものの人だと考えることにしておきます。さらに、アガメムノンのもとで共に出征したことにしてもかまいません。望む人がいれば、文字の発明より前に生まれたことにしてもかまいません。36:2 先に述べたモーセが、トロイアの陥落そのものより、非常に多くの年数だけ前に生まれたことが、明らかになるからです。そして、トロイアの建設や、トロスとダルダノスよりも、はるかに古いことが明らかになるのです。36:3 証明のため

に、わたしは、カルデヤ人、ピニケ人、エジプト人を証人として用います。それ以上、わたしが何を言う必要があるでしょうか。説得すると約束する者は、聞く人々に事柄を語るとき、話をより短くするべきだからです。36:4 ベロッソスは、バビロン人で、彼らのもとのベルの祭司で、アレクサンドロスの時代の人でした。彼は、アレクサンドロスの後の三代目のアンティオコスのために、カルデヤ人の歴史を三巻にまとめ、王たちのことを述べました。その中で、王の一人の、ネブカデネザルという名の者のことを語っています。ネブカデネザルは、ピニケ人とユダヤ人に向かって出陣しました。わたしたちは、これらのことが、わたしたちの預言者たちによって告げられていたことを知っています。それが起こったのは、モーセの時代よりずっと後で、ペルシャ人の支配の七十年前です。36:5 ベロッソスは、最も信頼に足る人です。その証拠はユバです。ユバは『アッスリヤ人について』を書き、ベロッソスから歴史を学んだと言っています。ユバの『アッスリヤ人について』は二巻あります。

37〜42章　ピニケ人とエジプト人の記録、アルゴスの王たち、結び

37:1 カルデヤ人の次に、ピニケ人のことは次のとおりです。彼らのもとには、三人の人がいました。テオドトス、ヒュプシクラテス、モコスです。この三人の書物を、カイトスがギリシア語に移しました。彼は、哲学者たちの伝記も詳しく書いた人です。37:2 いま挙げた人々の歴史には、王たちの一人の時代にエウロペの略奪が起こったことが記されています。メネラオスがピニケに来たことと、ヒラムのことも記されています。ヒラムは、ユダヤ人の王ソロモンに娘を嫁がせ、宮を建てるために、あらゆる種類の木材を贈りました。37:3 また、ペルガモのメナンドロスも、同じことについて記録を残しました。ヒラムの時代は、すでにトロイア戦争に近いころです。そして、ヒラムと同じ時代のソロモンは、モーセの時代よりずっと後の人です。

38:1 エジプト人には、年代の正確な記録があります。彼らのもとの事柄を説き明かしたのは、プトレマイオスです。王のプトレマイオスではなく、メンデスの祭司です。彼は、王たちの事績を述べる中で、ユダヤ人がエジプトを出たのは、エジプトの王アモシスの時代だと言います。その旅は、モーセに導かれて、のちに行き着いた地方へ向かうものだった、というのです。38:2 彼は、こう言います。『アモシスは、イナコス王の時代の人であった』。この人の後に、文法家のアピオンがいます。たいへん評判の高い人です。彼は、『エジプト誌』（この書は五巻あります）の第四巻で、ほかにも多くのことを言っています。そして、こう言うのです。『アルゴスのイナコスの時代の人アモシスが、アウアリスを壊した。メンデスのプトレマイオスが年代記に書いたとおりである』。38:3 イナコスからトロイアの陥落までの時は、二十世代になります。その証明は、次のとおりです。

39:1 アルゴスの王たちは、次のとおりです。イナコス、フォロネウス、アピス、クリアシス、トリオパス、アルゲイオス、フォルバスです。クロトパス、ステネラオス、ダナオス、リュンケウス、プロイトス、アバスです。アクリシオス、ペルセウス、ステネラオス、エウリュステウス、アトレウス、テュエステス、アガメムノンです。このアガメムノンの治世の十八年目に、トロイアは陥落しました。39:2 思慮のある人は、細心の注意を払って理解するべきです。ギリシヤ人の言い伝えによれば、彼らのもとには、歴史の記録さえなかったのです。いま挙げた人々に文字を伝えたカドモスは、多くの世代の後に、ボイオティアに来たからです。39:3 イナコスの後、フォロネウスの時代になって、獣のようなさすらいの生活に、ようやく区切りがつきました。そして、人々の暮らしが整えられました。そのため、モーセがイナコスの時代の人であることが明らかになったなら、モーセはトロイア戦争より四百年古いことになります。39:4 これは、アッティカの王たちの系譜［と、マケドニヤ、プトレマイオス家、またアンティオコス家の王たちの系譜］[1]から示されます。そこで、よりはっきりした事績がギリシヤ人のもとで書き記され、知られるようになったのは、イナコスの後のことです。そうであれば、それがモーセより後のことでもあるのは明らかです。39:5 実際、イナコスの後のフォロネウスの時代には、アテネの人々のもとでオギュゴスが記憶されています。彼の時に、最初の洪水が起こりました。フォルバスの時代にはアクタイオスがいました。アッティカがアクタイアと呼ばれるのは、彼にちなむのです。トリオパスの時代には、プロメテウスとエピメテウスとアトラス、二つの性質を持つケクロプス、そしてイオがいました。クロトパスの時代には、パエトンのときの大火と、デウカリオンのときの大雨がありました。ステネラオスの時代には、アンフィクテュオンの治世と、ダナオスのペロポネソスへの到来がありました。ダルダノスによるダルダニアの建設と、エウロペがピニケからクレテに連れて来られたことも、この時代です。リュンケウスの時代には、コレの略奪と、エレウシスの神域の創建がありました。トリプトレモスの農耕と、カドモスのテーバイへの到来と、ミノスの治世もです。プロイトスの時代には、エウモルポスがアテネの人々と戦いました。アクリシオスの時代には、ペロプスがフ

ルギヤから渡って来て、イオンがアテネに来ました。二人目のケクロプスと、ペルセウスとディオニュソスの事績、オルフェウスの弟子ムサイオスも、この時代です。そして、アガメムノンの治世に、トロイアは陥落しました。

40:1 ですから、先に述べたことから、モーセは、古い英雄たちや戦争や悪霊たちよりも古いことが明らかになりました。そして、年齢で勝る者を信じるべきです。その泉から彼の説を汲んでおきながら、それを認めずにいるギリシヤ人を信じるよりもです。彼らのもとには、余計な詮索にふける多くのソフィストたちがいました。彼らは、モーセや、彼と同じように哲学する人々から知ったことを、何であれ、偽造しようとさえしたからです。第一に、何か自分独自のことを言っていると思われるためです。第二に、自分の理解しなかったことを、作り上げた言葉の飾りで覆い隠し、真理を作り話のようにゆがめるためです。40:2 たしかに、わたしたちの生き方と、わたしたちの律法に沿った歴史については、別の書で示すことにします。神のことについて言い立てた人々に向けた書です。そこで示すのは、ギリシヤ人のもとの学者たちがそれについて何を語ったか、それに触れた人がどれほどいて、だれであるかです。

41:1 しかし、肝心なことは、細心の注意を払って、急いで明らかにするべきです。それは、モーセがホメロスより古いだけでなく、ホメロスより前の書き手たちよりも古いということです。その書き手とは、リノス、フィランモン、タミュリス、アンフィオン、ムサイオスです。オルフェウス、デモドコス、フェミオス、シビュラです。スパルタに来たクレテのエピメニデス、『アリマスペイア』を書いたプロコンネソスのアリステアスです。ケンタウロスのアスボロス、イサティス、ドリュモン、クプロのエウクロス、サモスのホロス、アテネのプロナピデスです。41:2 実際、リノスはヘラクレスの師です。そのヘラクレスは、トロイア戦争より一世代前の人だと分かっています。このことは、トロイアに出征した彼の子トレポレモスから明らかです。41:3 オルフェウスは、ヘラクレスと同じ時代の人です。そのうえ、彼の名で伝わる作品は、アテネのオノマクリトスがまとめたものだと言われています。オノマクリトスは、ペイシストラトスの子らの支配のころ、第五十オリュンピア紀ごろの人です。41:4 オルフェウスの弟子がムサイオスです。アンフィオンは、トロイア戦争より二世代前の人なので、好学の人々のために、彼についてこれ以上書き連ねる必要はありません。デモドコスとフェミオスは、トロイア戦争そのものの時代の人です。一人は求婚者たちのもとで、一人はファイアケス人のもとで暮らしていたからです。41:5 タミュリスとフィランモンは、これらの人々よりそれほど古くはありません。たしかに、一人一人がそれぞれの分野で取り組んだことと、その年代と記録については、あなたがたに書き記しました。思うに、きわめて細心の注意を払ってです。41:6 しかし、今まで足りなかったところも満たすために、賢いとされている人々についても、なお証明をします。実際、ミノスは、あらゆる知恵と機知と立法で抜きん出ていると考えられた人です。彼は、ダナオスの後に王となったリュンケウスの時代の人で、イナコスの後の十一世代目です。41:7 リュクルゴスは、トロイアの陥落よりずっと後に生まれ、オリュンピア紀の百年前に、ラケダイモン人に法を与えました。ドラコンは、第三十九オリュンピア紀ごろの人だと分かります。ソロンは第四十六オリュンピア紀ごろ、ピュタゴラスは第六十二オリュンピア紀ごろです。41:8 オリュンピア紀は、トロイア戦争より四百七年後に始まったと、わたしたちは示しました。こうしてこれらのことが証明されたので、さらに七賢人の時代についても、手短に書き記すことにします。41:9 いま挙げた人々のうちで最も古いタレスは、第五十オリュンピア紀ごろの人です。これで、その後の人々のことも、手短にですが、ほぼあなたがたに語ったことになるからです。

42:1 ギリシヤの人々よ、異民族に従って哲学するわたしタティアノスが、これらのことをあなたがたのためにまとめました。わたしは、アッスリヤ人の地に生まれました。そして、まずあなたがたのものを学び、次に、今わたしが宣べ伝えると公言しているものを学びました。42:2 今や、わたしは、神がどなたであり、神による創造が何であるかを知っています。そこで、神に従う生き方を否まずに保ったまま、説の吟味を受ける用意をして、自分をあなたがたの前に差し出します。

訳注

1 括弧の中は、後の時代に書き加えられた語とみられている。

ギリシア人への演説

2026年 11月 23日 版
著者　タティアノス
制作　藤遥
発行　christian-classics-jp
公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/tatian-address-to-the-greeks/
原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/tatian-address-to-the-greeks
全文を、ギリシア語原文（Λογος προς Ελληνας）から AI を使って翻訳しました。
訳文は CC BY-SA 4.0 で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。